

「神無月いつも時雨は」考

——源氏物語引歌瞥見——

一

源氏物語の葵卷の中で、光源氏の文の中に「いつも時雨は」という語句が見えるのであるが、この部分従来は『源氏釈』以来、出典未詳歌の「神無月いつも時雨はふりしかどかく袖くたす（ぬらす、ひつる）をりはなかりき」を諸注釈書が引歌としてあげているが、私見によれば、紫式部の伯父の藤原為頼の和歌を踏まえているのではないかと思われるので、そのことについて考察してみたい。

二

問題となる箇所は次のような場面である。

葵の上の逝去の後、傷心の日々を送っている光源氏は、時雨の降る日に、義兄三位中将（頭中将）や義母大宮と和歌を詠み交わし、「なほいみじうつれづれなれば」「けふのあはれはさりともし見知りたまふらむと推しはからるる御心ばへ」の朝顔姫君に次のような文を送るのである。

わきてこの暮こそ袖は露けけれもの思ふ秋はあまたへぬれど
いつも時雨は

田 坂 憲 二

右の「いつも時雨は」の部分は、当然何らかの引歌があったるべき表現である。源氏物語の最初の注釈書である世尊寺伊行の『源氏釈』では、引歌として次のものを挙げてゐる。

神無月いつも時雨はふりしかどかく袖くたすをりはなかりき(尊経閣文庫本による。『源氏或抄物』や書陵部本では第四句「かく袖ぬらす」とある。)

因みに『奥入』(定家自筆本)では、第四句「かくそでひつる」とあり、『紫明抄』(京大本)『河海抄』(天理図書館本)『細流抄』(内閣文庫本)も同形であり、注釈史の上ではこの形で継承されてゆく。(注2)

この「神無月いつも時雨は」の和歌は『細流抄』が「引歌よくかなへり」と述べているように、季節といい、語句の整合性といい、全体に漂う哀感といい、この場面に完璧に符合するものである。しかし、そのあまりの適合ぶりゆえに、一抹の不安が無いわけではない。というのは、この歌は源氏物語の注釈書以外には見出だせないもので、いわゆる出典未詳歌である。『源氏釈』のあげる引歌には、今日他の文献では知ることの出来ないものも多く、そのことが『源氏釈』の資料的価値を著しく高めていることは言うまでもない。しかしその出典未詳歌の中には、源氏物語の本文と余りに密接過ぎて、やや小首を傾げたくなるようなものも時折だが含まれているのである。この「神無月いつも

時雨は」の場合は直ちにそうであるとまではいえないうちにも、総角巻の引歌との関係から、その信憑性を疑うものである。

総角巻で、中の君と結婚した匂宮は、その後母明石中宮の監視などもあって、なかなか宇治を訪れることが出来ない。十月一日の、紅葉狩りにかこつての宇治遊覧も、八宮邸の目前で引き返す形となり、宇治の姉妹は大きな衝撃を受けるのである。心労のあまり大君は病床に伏せるようになるが、そのような或る日、「夕暮れの空のけしきいとすぐくしぐれて、木の下吹き払ふ風の音」などもはげしい日に「いと暗くなるほどに」匂宮からの文が宇治へ届けられる。

例の、こまやかに書きたまひて、

ながむるは同じ雲ゐをいかなればおぼつかなさこそふる時雨ぞ

「かく袖ひつる」などいふこともやありけむ

この「かく袖ひつる」の部分の引歌については、諸注釈書によつて説が分かれている。

まず『源氏釈』『奥入』『紫明抄』『河海抄』などは、次の出典未詳歌を挙げる。

(a) いにしへもいまもむかしもゆくすへもかく袖くたすたぐひあらじな

(『源氏釈』尊経閣文庫本による。『源氏或抄物』は四句

「かく袖ひつる」、「奥入」は四五句「かく袖ひつるをりはあらじを」、「紫明抄」「河海抄」は四五句「かく袖ひつるをりはなかりき」

一方、『花鳥余情』『細流抄』『湖月抄』などは、上述の葵巻と同じ和歌を指摘する。

(b)神無月いつも時雨はふりしかどかく袖ひつるをりはなかりき

『岷江入楚』は、(a)(b)両説並記する。現代の注釈書では玉上『評釈』が(b)説、小学館『全集』が両説並記である。

ここで注目したいのは、『源氏釈』を中心とする初期の注釈書である。『源氏釈』などでは、葵巻の引歌としては「神無月いつも時雨は」の和歌を挙げながら、総角巻では「いにしへもいまもむかしも」の別の出典未詳歌を指摘するのである。『源氏釈』はどうしてこの場面では、「神無月いつも時雨は」を引歌として認定しなかったのだろうか。この和歌は源氏物語の本文と語句の上でも整合性があるし、総角巻の場面も葵巻同様に十月だからである。にも関わらず『源氏釈』などが総角巻で「神無月いつも時雨は」の和歌を引用してこないのは、この和歌のある種の不安定さを示しているようである。即ち、世尊寺伊行も藤原定家も素寂も四辻善成も「かく袖ひつる」という語句からは、かつて葵巻で引歌として指摘した「神無月いつも時雨は」の和歌は連想できなかったのである。勿論、定家以降は先行する

注釈書に引きずられた可能性はあるだろうが、初期の主要な注釈書が揃ってこの和歌とは別のものを挙げていることはやはり無視できないであろう。とすると少なくとも「神無月いつも時雨は」の和歌の第四句は、「かく袖ひつる（くたす）」の形ではないのではないかということが推測される。そうでもないかぎり、総角巻でこの和歌が引歌とされない理由は見出しにくいようである。そこで、源氏物語成立以前の和歌を調べてみると、葵巻で『源氏釈』等が引用する出典未詳歌と良く似た歌で、下の句が異なるものが唯一存するのである。それは、紫式部の伯父の藤原為頼が、粟田右大臣道兼に送った次の和歌である。（なお、詠歌事情などについては次節で述べる）

神無月いつも時雨はかなしきを子恋ひの森はいかが見るらん

この和歌であれば、葵巻の「いつも時雨は」の引歌としてはふさわしいし、総角巻では下の句が異なるため引歌とはならない。したがって、総角巻では「いにしへもいまもむかしも」が引歌となるのである。推測をややたくましくすれば、世尊寺伊行は為頼の「神無月……子恋ひの森はいかが見るらん」の和歌を、葵巻の引歌として指摘しようとしたが、記憶がやや曖昧であったために、源氏物語の本文に引きずられて、下の句が「かく袖ひつる（くたす）」をりはなかりき」となってしまったのではないだろうか。しか

し、本来はそのような和歌は存しないのであるから、総角巻の「かく袖ひつる」の時は、この和歌は挙げずに、別の「いにしへも」の和歌を指摘したのではないかと思われる。

紫式部はこの伯父の為頼にとても可愛がられたようで、

『為頼集』には紫式部が越前へ下向する際に詠み送った和歌なども収められている。^(注3) また、この伯父の家集には『伊勢物語』ばりの歌物語的な部分も多くあり、^(注4) 紫式部に与えた影響は極めて大きなものがある。それだけに紫式部にとって為頼の和歌は良く知悉したもののように、『紫式部集』には為頼の和歌を踏まえたと思われるものを三首見出すことが出来る。源氏物語の中にも『為頼集』の和歌は、引歌として用いられているものが四首、場面構成のヒントとなっているものが二首あるのである。従って、紫式部が伯父為頼の「神無月いつも時雨は」の和歌を引歌として使用する蓋然性はかなり高いと言わねばならないであろう。

また、「神無月いつも時雨はふりしかどかく袖ひつる（くたす）をりはなかりき」という出典未詳歌が、たとえ存在したにしても、現実に伯父為頼の和歌がある以上、紫式部が葵巻の朝顔姫君への文の場面を叙するに当たって、為頼の和歌を意識しなかった可能性はないだろうから、引歌としては、出典未詳歌と為頼歌と両説並記をしておくべきだろう。ちょうど、岩波『古典大系』で、幻巻の「ふりしかどと、ひとりごちおはす」の部分に山岸徳平氏が出典未詳

歌と共にこの為頼の和歌を挙げているように。^(注5)

ところで総角巻では『花鳥余情』『細流抄』などが、引歌として「神無月……かく袖ひつる……」の和歌を挙げている。しかしこれは『源氏釈』や『奥入』の葵巻の引歌が知識としてあったためと思われ、いわば先行注釈書からの孫引きのようなものといってよからうから、根源的な問題とはなり得ないだろう。

猶、葵巻では、葵の上の死後忌みに籠もっている光源氏のもとへ、六条御息所からも、菊の枝に付けて弔問の手紙が送られている。

人の世をあはれときくもつゆけきにおくる袖を思ひこそやれ

この部分に『水原抄』ではないかと推測されている『葵巻古注』は、紫式部の大叔父藤原清正の贈答歌（『後撰集』二十、哀傷、一四〇九、一四一〇）を挙げている。

清正が枇杷ノ大臣ノイミニコモリテ侍ケルニツカハシケル 藤原守文

世中ノカナシキコトヲキクノウヘニヲクシラツユノナミダナリケル

返シ 藤原清正

キクニダニツユケカルラン人ノ世ヲメニミシ袖ヲ思ヒヤルラン

詠歌状況といい、縁語・掛詞などの表現といい、六条御息

所の和歌と『後撰集』の贈答歌には、著しく共通性が多い。紫式部がこの贈答歌を念頭においていたであろうことは間違いない。^(注6)

六条御息所からの弔問の場面と、光源氏が朝顔姫君へ文を送る場面とはさほど隔たっておらず（『源氏物語大成』で約四頁）、一連の話題でもある。しかも、葵巻においては、朝顔姫君と六条御息所は、作者によって意識的に対比されているのである。^(注7)従って、御息所の和歌に大叔父清正の和歌を響かせた紫式部が、朝顔姫君とのやりとりで、今度は伯父為頼の和歌を引歌として用いることもあるのではないだろうか。一つの補強材料としてあげておきたい。

三

ところで、為頼の「神無月いつも時雨は」の歌については、実はもう一つ解決しなければならない問題が付随しているのである。それは、この和歌とほぼ同一のものが異本系『清少納言集』にも存し、萩谷朴氏のように「清少納言の歌の、『為頼集』への混入と見るべき」とする考えもあるからである。もしこの和歌が清少納言の作であるとすれば、その歌を紫式部が源氏物語に引歌として使うことは、まずあり得ないことであろう。また『清少納言集』では、第二句が「もみぢはいつも」となっており、この形では源氏物

語の引歌とはなり得ない。従って、この歌の本当の作者は為頼であるのか清少納言であるのか、厳しく吟味されなければならぬ。

まず、資料を整理してみよう。『為頼集』、異本系『清少納言集』及び、これに関連するものとして『実方集』があるが、論述の関係上それらを一括して先に示しておく。

『為頼集』（三手文庫本）

はかりてあはざりける女に

49 しらたまか涙かなにぞよひくにはかるあたりのそでにこぼる、

故あはたの右大臣どののはかなくなりたまひての十月に

60 神な月いつもしぐれはかなしきをこゝろのもりもいかゝみるらん

異本系『清少納言集』（書陵部本、五〇一・二八四）

28 右大將殿のこなくしたまへるがかへりたまふに神無月もみぢはいつもかなしきをこゝろのもりはいかゝみるらん

かへし

さねかたのきみ

29

いつとなくしぐれふりしくたもとはめづらしげな
き神無月かな

30

こよひあはむといひてさすがにあはざりければ
しらたまかなみだかなにぞよるごとにみたるあひだ
のそでにこぼる、

31

うちなる人のひとめつゝみて、うちにてはとい
ひければ さねかた
いづといるとあまつそらなる心ちしてものおもはず
るあきの月かな

32

二条の右大臣にをくれたてまつりて すけゆき朝臣
ゆめならでまたもみるべき君ならばねられぬいをも
なげかざらまし

33

さねかたのきみのみちのくにへくだるに
ところもふちふちもせならぬなみだ河そでのわたりは
あらじとぞおもふ

48

『実方集』（書陵部本、一五〇・五六〇）
十月つごもりがたに、信方の中將に
いつとなくしぐれふりぬるたもとはめづらしげな
き神無月かな

「神無月」の歌は、『為頼集』には、単独で収められてい

るが、『清少納言集』では「さねかたのきみ」との贈答歌と
なっている。ところが、「さねかたのきみ」の「いつとなく」
の返歌は、『実方集』によれば、「信方の中將」に送られた
歌となっている。『実方集』の系統によつては、「十月の一
日ころ、のぶかたの中將に」とか「十一月ついたちのひ、
女のもとに」などと 詞書に小異があり、又、伝本によつ
ては、更に他の歌との贈答歌となっている場合もあるが、
「神無月」の和歌との贈答の形を取るものは一つもないとい
う点では一貫している。したがって、『為頼集』『清少納言
集』『実方集』の三資料を同時に満足させることは不可能で
ある。考えられる可能性としては、次の二つがある。

(1) 『為頼集』と『実方集』が正しく、『清少納言集』は、
為頼と実方の和歌を、清少納言と実方の和歌として取
り入れた。

(2) 『清少納言集』の贈答の形が正しく、『為頼集』は清少
納言の和歌を為頼の和歌として吸収し、『実方集』は、
送り先を改めて取り入れた。

蓋然性からすれば、二つの資料の誤りを想定しなければな
らない(2)説よりも、『清少納言集』一つの誤りとすれば良い
(1)説のほうが、高いといつて良いだろうが、一方で(2)のよ
うな考えを取る立場もある^(注9)ので、(1)説を改めて補強してお
く必要があるだろう。

まず、第一に、『清少納言集』28、29は、異本系に特有の

ものであり、流布本系には存しないものであることを押さえておかねばならない。異本系の特有歌は、清少納言の詠歌でないことが明らかであるものを多く含んでいるのであるが、特に31、41は清少納言と無関係な和歌が集中するとされているところである。さらに後述するごとく、30番歌も清少納言の実作ではないと思われるから、不安定な要因を含む28、29番歌を殊更清少納言が実際に関わった贈答歌とする必要はないのではないだろうか。異本系巻末部の28、41の特有歌は、一貫して清少納言とは無関係な和歌が並べられているとすべきではないだろうか。

右の考えの前提として、『清少納言集』30番歌について結論を出しておかねばならない。30番歌は、これもまた『為頼集』49番歌との共通歌である。こちらの場合は、二つの資料を同時に満足させる考えがないではない。それは、為頼から清少納言へと送った和歌とする考えである。事実、中世の私撰集『秋風集』では、両資料を参看したためか、『清少納言』こよひとのみたのめてすぐしければ、いひつかはしける、藤原のためより朝臣」として、この和歌を収めている。その辺の事実関係は確認のしようがないので、推測を重ねることは控えるが、留意しておかねばならないのは、この「しらたまか」の和歌が、明らかに『伊勢物語』六段を踏まえて詠作されていると言うことである。しかし『為頼集』には、『伊勢物語』に触発されたと思われる和

歌が多く、「しらたまか」の和歌も為頼の実作であると認めて良いだろう。^(注10)「はかるあたり」という口語的なやや大げさな言い方も、いかにも為頼らしいものである。^(注11)「しらたまか」の和歌を『為頼集』の編者が誤って、『清少納言集』の和歌を取り込んだ、とする必要はないのではあるまいか。

『清少納言集』30番歌が、為頼の詠歌である以上、その二首前の28番歌もまた、為頼の詠んだものである可能性が強いだろう。即ち『清少納言集』28、30番の和歌は、共に『為頼集』中の和歌を取り入れて、清少納言自身の詠じた歌、もしくは清少納言に送られた歌とされたのではないだろうか。

このあたりの『清少納言集』の異本系特有歌に信を置き難いことのひとつとして、実方との関連がある。『実方集』と『清少納言集』との関係については、既に萩谷朴氏の委細を尽くした考察があるのでそれを参看されたいが、^(注12)31番歌については、『実方集』から清少納言とは無関係な和歌を取り入れたものであり、33番歌は、実方が親に死別したときに送った哀傷の和歌を小大君が詠じたの（『小大君集』18番歌）を清少納言作のごとくすり替えたものであるとされている。31、33番歌が実方に関わる和歌で清少納言とは本来無関係なものを吸収しているとしたら、同じように異本系特有歌であり配列の上でもすぐ近くにある29番歌も『清少納言集』が『実方集』をもとに改変した可能性が極めて高

いと言えよう。28・29の贈答歌のうち返歌が清少納言とは無関係なものを改変してゐるとしたら、贈歌の28番歌も清少納言の自作ではなく、他人の詠じたもの（ここでは為頼）である可能性が一層強くなろう。

かくして多くの状況証拠が、「神無月」の和歌は、清少納言の作ではなく、藤原為頼の作であることを示しているのだが、実は『為頼集』の側にもかなり大きな弱点があるのである。この問題进行处理することなしに、一挙に為頼作としては不実のそしりを免れないであろう。以下このことについて検討する。

『為頼集』60番歌と『清少納言集』28番歌は第二句に小異はあるものの、下の句は共に「ここひのもりはいかがみるらん」の形である。「子恋ひの森」という語を含んでいることと、一首全体に漂っている哀調とから考えて、子供を亡くした親に詠み送ったものであると考える良いだろう。類歌としては『拾遺集』二十、哀傷、一三〇三「順が子なくなりて侍りけるころ、とひにつかはしける、清原元輔、思ひやるここひのもりのしづくにはよそなる人の袖もぬれけり」などがある。

そうすると問題になるのは、『為頼集』の「故あはたの右大臣どのはかなくなりたまひて」の本文である。というのは、栗田右大臣藤原道兼が薨じたとき（長徳元年五月八日）、既に父の兼家は鬼籍に入っており、また道兼の年齢（三

五歳）も、「子恋ひの森」という表現にはややふさわしくないであろう。とすると、これは、「右大臣どのは」の部分は「右大臣どのは、こ」のような形が本来のもので、「との、」は、「との、こ」の誤写によるものとも考えられないだろう。即ち「の」の踊り字と「こ」の草体の字形の一部分が類似するために、目移りで一字分書き落としたのではないかと考えるのである。『為頼集』は、本文の損傷がはなはだ大きい家集であるので、このようなこともあり得ないことではなからう。ただ誤写説は確証の無いことであるので、この問題は『為頼集』にとってやはり大きなマイナス材料であることになろう。

しかし、『為頼集』のマイナスが、直ちに『清少納言集』にとつてプラスの材料になるかというと、そうも単純には行かないようである。『清少納言集』では、「右大將殿の、こなくしたまへるが」となっており、『為頼集』の「あはたの右大臣」とは送った相手が異なっている。道兼も右大將の時期があるから（永祚二年―長徳元年）、二つの資料が同一人物をさしている可能性は皆無ではないが、中関白家に仕えた清少納言が道兼に歌を送るということはやはり考えにくい。^(注13)『清少納言集』に「右大將殿」とあれば、やはり萩谷朴氏のように、藤原濟時あたりを想定するのがもつとも妥当であろう。^(注14)では藤原濟時であるとすれば、詞書にあるような子供を先立たせたというような事実はあるであろう

か。萩谷氏は、寛和二年出家した長命侍従（相任）が間もなく没したのではないかと推測し、一方藤原道兼の場合は「道兼の子女で早逝したものを知らない」とされている。しかし、相任の場合は亡くなったという確実な証拠はないので、ほかに有力な説が出てくればそれに代わられるであろう。これに対して、道兼は実は最愛の子供に先立たれているのである。

『尊卑分脈』は、道兼の子供として兼隆、兼綱、兼信等をあげるが、兼隆の上に同腹（藤原遠量女）の兄福足（福垂）君がいた。しかして、栗田右大臣道兼は、この長男福足君を盲愛していたが、この福足は永祚元年八月十三日に父に先立って亡くなっているのである。

権大納言息子福垂去十一日煩腫物今日死去云々（『小右記』永祚元年八月十三日）^{（注15）}

福足のことは、兼家六十の賀の折りの行動など、その奇矯な性癖とも相まって『大鏡』『栄花物語』にも詳述されており、当時の人々の耳目を集めた存在であつたらしい。『栄花物語』「さまざまのよろこび」では、福足の死について次のように述べる。

この男君達の御中のこのかみにおはせし君をばふくたり君と聞えし、一昨年の八月にわづらひてはかなう失せ給ひにしかば、口惜しき事におぼすべし。いみじうさがなくて、世の人に安くも言ひ思はれざりしかばに

やとぞ、人も聞えける。

一方、『大鏡』では、その死の原因について「この君、人しもこそあれ、蛇れうじたまひて、その祟りにより、頭にものはれて、うせたまひにき」と、記している。更に『拾遺集』二十、哀傷、一二八一には天逝したわが子を傷む道兼自身の次のような歌も収められているのである。^{（注16）}

ふくたりといひ侍りけるこの、やり水にさうぶを
うゑおきてなくなり侍りにける、のちの年おひい
でて侍りけるを見侍りて

しのべとやあやめもしらぬ心にもながからぬよのうき
にうゑけん

したがって、「神無月」の和歌が送られた相手としては、子供に先立たれたという確実な証拠のない済時を殊更に想定する必要はなく、その死が当時の人々の話題となった福足君の父である「あはたの右大臣」こそがもつともふさわしいであろう。また、道兼は福足が亡くなった翌年に右大將となつてゐることから、『清少納言集』の「右大將」が道兼である可能性は何れにしてもない。『為頼集』の「あはたの右大臣」は極官表記である。又、為頼の弟の為時が道兼に親近していたことは周知のことであり、為頼が福足君の死を傷んだ歌を詠むということは、当然考えられることである。猶、福足君の死の日時から考えて、満中陰はちょうど十月の初め頃となる。この和歌は、恐らくその頃に詠ま

れたものではないだろうか。

かくして、『為頼集』には、踊り字の脱落というものを想定しなければならぬが、他の因子は、すべて『為頼集』を正、『清少納言集』を誤とするものであり、「神無月」の和歌はやはり為頼の作と断じて良いと思われる。

四

以上見てきたように、源氏物語の葵巻に見える「いつも時雨は」は、藤原為頼の詠歌

神無月いつも時雨はかなしきを子恋ひの森もいかがみるらん

を踏まえていると見るべきであろう。その理由は次の三点である。

一、従来指摘されていた出典未詳歌は、類似の条件下にある総角巻では引歌として指摘されておらず、その存在に疑問がもたれること。

二、紫式部は、伯父の為頼に可愛がられ文学的影響を受けており、家集や源氏物語中にしばしば為頼の和歌を用いていること。

三、葵巻には、大叔父清正の和歌も踏まえられており、文脈や作品構造から考えて為頼の和歌が引用される蓋然性があること。

猶、為頼の「神無月」の和歌は、従来『清少納言集』よりの混入とする見方もあったが、為頼が、福足君の死を傷んで、満中陰の頃に父の藤原道兼に送ったものであらうと思われる。

注

注1 田坂『源氏釈諸本集成』昭62。

注2 そのためか『日本古典文学全集』では、『源氏釈』の本文を「かく袖ひつる」として挙げる（葵巻51頁注21）が、このような伝本はない。『奥入』以下との混同であらう。

注3 角田文衛『紫式部とその時代』昭41。

今井源衛『紫式部』昭和41。

筑紫平安文学会『為頼集全釈』、平5刊行予定。

注4 田坂『為頼集』の構造とその歌風『為頼集全釈』所収。

注5 4巻493頁、補注238。

注6 田坂『葵巻古注』（水原抄）について（上）『香椎潟』37、平4・3。

注7 田坂「朝顔姫君の構想に関する試論―葵巻を中心として―」『文芸と思想』47、昭58・1。

注8 『清少納言全歌集 解釈と評論』昭61・5。

注9 萩谷注8書。

3、所収。
岸上慎二「清少納言集について」『枕草子研究（続）』昭58・

猶、『清少納言集』28と29の贈答歌としての呼応関係も、「贈答歌として、寸分の隙もない」（萩谷注8書）とする立場と、「29歌は、28為頼歌の返歌としての内容はもっていないことは明らか」（橋本不美男「清少納言集」『枕草子講座』1、昭

50・10)とする考えの対立がある。

注10 田坂注4論文。

注11 萩谷氏は「「はかるあたり」即ち「欺す人のあたり」では、余りに露骨過ぎる」とする、注8書。

注12 注8書。

注13 注8書。

注14 岸上慎二氏もこの「右大将」を藤原濟時と推定する(注9書)。

注15 『小右記』の本文は『大日本古記録』による。なお『栄花物語』「さまざまのよろこび」は福足の死去を永延二年のこととするが、『小右記』の記述に従う。

注16 『玄々集』は、道兼の北の方の詠作とする。

〔付記〕 本稿を成すに当たって山田洋嗣氏から種々御教示を受けた。感謝申し上げる。